袋井市総合教育会議　会議録（要旨）

会　議　名	令和７年度 第３回総合教育会議
招 集 日 時	令和８年1月19日(月)午後１時30分
会 議 時 間	午後１時30分から午後３時09分まで（1時間39分）
場　　所	教育会館３階　ICT研修室
出　席　者	大場規之　　市長 鈴木一吉　　教育長 鈴木万里子　委員 溝口知秀　　委員 吉田陽子　　委員 山本茂広　　委員 （計：６人）
欠　席　者	無し
傍　聴　者	無し
当 局 出 席 者	石黒克明　　石黒教育部長 小澤一則　　教育監 山岡ゆかり　教育企画課長 平野邦孝　　未来の教育推進室長 渡邊規恵　　教育企画課課長補佐 廣岡真理　　教育総務係係長 （計：６人）　　（合計：12人）
会議に付した事　　件	別紙「令和７年度　第３回袋井市総合教育会議次第」のとおり

令和７年度　第３回袋井市総合教育会議　次第

日時：令和８年１月19日（月）
午後１時30分
場所：教育会館ＩＣＴ研修室

1　開　会

2　市長あいさつ

3　議　事
袋井市教育大綱最終案について
(1)　袋井市教育大綱パブリックコメント及び児童生徒のアンケート結果について
(2)　意見交換

4　閉　会

令和７年度　第３回袋井市総合教育会議（要旨）

１　開会

●教育企画課長

　それでは、定刻となりましたので、

『第３回　袋井市総合教育会議』を開催いたします。

教育企画課長　山岡です。

２　会議録署名委員の指名

　まず、会に先立ちまして、

　本日の会議の会議録の署名者２名につきまして、

　規則により、議長が指名することとなっておりますが、事務局からの提案として

　溝口委員と吉田委員にお願いしたいと存じます。

　いかがでしょうか。

〇溝口委員　吉田委員

　わかりました。

〇教育企画課長

　ではよろしくお願いいたします。

３　市長あいさつ

〇市長

　改めまして、皆さんこんにちは。本年度第３回の総合教育会議ということで、お忙しい中お集まりをいただきまして、誠にありがとうございます。

　今年は例年よりも長い年末年始の休みでありましたが、天候にも恵まれ、穏やかに新年を迎えることができました。

　５日には、多くの皆様のご参加のもと、年賀交歓会を滞りなく開催することができ、改めて多くの市民の皆様のご支援のもと市政運営を行えていることに深く感謝申し上げます。

　また、先日は「はたちの集い」ということで、市としても大切なイベントをさせていただくことができました。

　20 歳を迎える、若者たちを見ますと、毎年いろいろな感動したり、新たな思いを感じたりするわけでございますけれども、今年も改めてはたちの皆さんの色々な決意な

どを聞いて、色々なことを感じた次第でございます。
　そして先輩の声ということで岡田さんに歌を歌っていただきまして、人の声の魅力というものを改めて感じた次第であります。
　岡田さんも触れてらっしゃいましたけれども、やはり、人のすることの魅力ということを感じたわけでございますけれども、そうして20歳を迎えてそして人としての魅力を見つけていく、磨いていく。それに当たってはまず生まれて夫婦が力を合わせて、また家族が力を合わせて子育てに取り組み、更にはそれが少しずつ学校教育や社会教育という場の利用しながら成長していくわけでございます。
　私たちは学校教育で、環境の整備に努めているわけでございますけれども、これから時代は変わっていきますけれども、家庭教育・学校教育・社会教育、これらの三つがしっかりと連携をとりながら、子供たちの成長を形づけていく。
　それをしっかりと日々、確認をしながら、また自覚をしながら、子供たち、若者たちに接していかなければならないと思っているところでございます。
　この総合教育会議でも、いろいろな形で、常に議論頂いてまいりました。
　これからもそうした緊張感を持って子どもたちの環境整備をより一層取り組んで頂きますようお願いをしたいと存じます。
　さて前回まで、皆さんとともに議論を重ねてまいりました。
　そして新たに策定いたしました教育大綱の最終確認と、現在行っておりますパブリックコメントの状況や子供たちへのアンケート結果につきまして御報告をさせていただいた後に、時間まで教育全般についての意見交換等、できればと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

〇教育企画課長
　ありがとうございました。
　次に、次第に沿って本日の内容を改めて確認させていただきたいと思います。
　本日の総合教育会議でございますが、ただいま市長の御挨拶からもありましたとおり、これまで袋井市教育大綱の見直しについて、2回議論頂きました。
　先般、議会にもご報告させていただきまして、基本方針や理念、大きなところについて、特に修正とかご意見もなく、大変いい教育大綱が出来上がりましたというようなご意見を頂戴しております。その上で、現在パブリックコメントということで1月23日まで、まだ少し日がありますが、これをいたしているところでございます。
　それから子供たちの現状ということで、自己肯定感や自己有用感について子供たちにアンケートもさせていただいておりますのでご報告をさせていただき、その結果も踏まえて最終的に2月の議会で、これを最終案で報告して公表、取り組んでいくように予定しております。

本日は、その辺りの確認と、最後は時間まで教育全般についての意見交換をフリートークでしていただければと思います。大体 15:00 ぐらいまでの予定で進めてまいりたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

それではここからの議事につきまして、議長である市長にお願いをしたいと思います。

〇市長

それでは議事に入らせていきます。

教育大綱の見直しについて、アとしてパブリックコメントについて、イとして児童生徒のアンケート結果について、それぞれをお願いいたします。

〇教育総務係長

それでは、私から、袋井教育大綱（案）パブリックコメントについて

ご説明を申し上げます。

資料は、A4 横の「袋井市教育大綱（案）」パブリックコメントの結果について、をご覧ください。

パブリックコメントの実施期間ですが、12 月 15 日から 1 月 23 日までとなっており、現在までに 7 人の方から 9 件のご意見をいただいております。

ご意見等の内容をお手元の資料のとおり、集約いたしましたので、主なご意見の内容と市の考え方につきまして、ご報告させていただきます。

はじめに、No.1～3 の大綱全体的なところの意見に関しましては、

「学校現場にも当てはまるところがおおく、大変納得できる方針であると感じた」という意見や、「子どもの視点を忘れることなく市の施策にも子どもの意見を取り入れていただきたい」という意見、「学校や地域において郷土愛を育むことが大切であると考える」などのご意見をいただいております。

また、No.4 の基本方針 1 の「自己肯定感を育む」に関しましては、　児童や保護者に「自分さえよければよい」という傾向が見られ、「自分に自信をもてる」「自分はそのままで良い存在だ」を強調すると自己中心性を助長する懸念がある。代わりに、人に役立ち感謝される「自己有用感」を重視する方が、社会との関わりを通じた肯定的な自己評価になり、本市の「心ゆたか」に適しているといったご意見がありました。このことに対し市の考え方としましては、「自分に自信が持てる」「そのままで良い」と感じる経験は社会での自己肯定や前向きな思考に繋がるため、まず自己肯定感を育むこと、また、幼少期から個性や意欲を尊重し思考を促すことで、自己有用感や生涯にわたる学びの基盤を育てていくといたしております。

また、No.7 の基本方針 3 の「学びたい時に、誰もが学ぶことができる環境を整え

る」に対する意見としましては、「大人がこどもたちの学びの様々な場面で関わることが重要」とする一方で保護者や地域住民が学校任せになりがちであり、「地域で子どもを育てる」意識を高めるための具体策を期待するといった意見がありました。それに対しましては、誰もがいつでもどこでも学び続けられる環境を整え、学校・家庭・地域が連携して支えることを示しており、具体的な施策は市の総合計画で整理・推進を図っていくといたしております。

次に表記について、No.9 の基本方針 2 だけが、個々が身に付ける、という表現になっているが、市としての方向性を示しているので、「基本方針 1」とそろえて「～育む」「～育成する」としてはどうでしょうか。という意見に対しては、本大綱は、行政はもとより、教育機関、市民、地域、企業など、市を構成する人や機関などすべてを対象と、市民ひとりひとりの主体的な取組を働きかけていくものである旨をお示しし、原案どおりとしていきます。

以上、簡単ではございますがパブリックコメントの説明とさせていただきます。

〇未来の教育推進室長

それでは、私の方から、児童生徒のアンケート結果についてご報告させていただきます。

今回のアンケート調査は、前回のこの場の協議の中で子供の自己肯定感に関する意識調査を把握したらどうかというようなご意見を頂きましたので、今回子供たちにアンケート調査を実施したということです。

これからの急激する変化の時代の中で、私たちは自分の良さや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら、様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り開き、持続可能な社会作りとなることができるように求められています。このことに立ち、自己有用感や自己肯定感を子供たちの中にどう育てるのかということを調査してきました。

調査対象といたしましては、小学校の 3 年生、5 年生並びに中学校の 2 年生、約 8 割の回答を得た次第でございます。

アンケート項目については、これは国が様々なアンケートを実施する中で、代表的な自己有用感、自己肯定感に関する質問を取捨選択する中で実施をしてまいりました。

また、並びについては、自己有用感、自己肯定感を塊としてやるのではなくて、ちりばめた中で、子供たちに自己有用感､自己肯定感に関するアンケートを実施しました。

結果については、7 番のアンケート結果というグラフをご覧ください。

こちらで色の濃いほうが最上位である、「当てはまる」という回答になります。
肯定率となる濃いほうと薄いほうを出したのは、「どちらかというと」とか、「当てはまる」という回答をしたことになっていきます。
ご覧のとおり、特に低学年の子供たちは「当てはまる」と自己有用感も自己肯定感もそのような結果になっております。
だんだん年齢を積み重ねるに伴って、「どちらかといえば」ということが増えてくると、このような実態になっているところです。
この自己有用感と自己肯定感につきましては、自己肯定感という、個人に関すること、それから自己有用感というのは、他者が関わるということで、どうしても自己有用感のほうが高い位置に来るわけですけども、やはり自己肯定感を高めていくのは本人が人の役に立っているという、そのよさを感じ取って、初めてこの、自己有用感・自己肯定感というものが高まってまいります。
特に、7の（2）の自己有用感の左から2番目にある、自分の考えや、意見が周りの人に役立っているか、やっぱりここが低いような結果が出ておりますので、このあたりが高まってくると自己肯定感も、自然とおのずと高まってくると、このような状況になるのではないかなと分析した次第でございます。
自己肯定感が高まってくるということは、すなわち自己有用感も高まってくるということで、とにかく、子供たちの中には、自己肯定感というものを育てていくことによって自己有用感の醸成にも意を排しながら取り組むことが必要であると、このようにまとめた次第でございます。以上でございます。

〇市長
ありがとうございます。今、事務局から説明をしていただきましたがご意見、ご質問等ありましたらお願いします。いかがでしょうか。

〇溝口委員
子供たちの回答は、多分素直に回答してくれたと思いますが、一般のパブリックコメントのほうでここに書いてくれた意見というのは、色々な意見はあるものの、全て前向きな意見に見えますけども、否定的な意見というのは特には出てなかったということでよろしいでしょうか。

〇教育企画課長
ありがとうございます。
大きなところも前回の基本方針を踏襲していることもございまして、多少文言や時代に合わせてメッセージ性を強くしたという部分があるのですが、批判的なものより

も、時代に合わせて今いいものができたと総じてそのようなご意見が多かったです。
　パブリックコメントに関しては、3か所、市役所と支所と教育会館、それとホームページでやっていますが、一般の皆様まで広く声を頂戴したというよりは、多くが、教育関係者、校長先生からのご意見であることも含めて、批判的なものは少なかったと考えております。
　その中でも、細かな今後の展望を持ってというようなご意見については、具体的な部分は、個別の計画の中で意を配しながら取り組んでいくというような考えでございますので、ここで基本方針や理念を変えてというよりは、そういったご意見を反映しながら、個別に取り組んでいきますと全体の方向性でおりますので、このような形の取りまとめもさせていただいているところです。

○溝口委員
　ありがとうございます。安心しました。

○市長
　いかがでしょうか。
　パブリックコメントのお話がありましたけれども、否定的ではないですが、パブリックコメント結果の4.5.6の基本方針のところで挙げられている自己肯定感に関して、前回の2回目のときにも議論頂きましたけれども、私どもとしては、あえて自己有用感を今回外すということになりましたけど、やはりお考えによっては自己有用感が必要じゃないかという方も中にはいらっしゃいます。
　いずれかでもという方も場合によって、例えば自己有用感という方ももしかしたらいらっしゃるかもしれないとのは、4.5.6読みながら感じた次第でありますけれども、あえて私たちは肯定感いうことに結論付け、これからの大綱ということで決めたわけですけれども、決して自己有用感が無くてもていいということではないわけでありまして、これからもこの議論っていうのは色々なところでされることになろうかと思います。
　いずれにしても、今後に向けて私たち自身もこの自己肯定感そして自己有用感に関して、いろいろな情報収集し、結果によって、また、社会的な考え方などにも敏感になりながらいく必要があるのではないかという感じもしました。
　ほかにいかがでしょうか。

○吉田委員
　やっぱりパブリックコメントが7人からっていうのは関心の低さがあらわれていると感じていて、教育大綱って言われると、保護者からするとそんなに身近なものでは

ないですし、ましてや子供がいない家庭にとっては、もっと高尚になると思うのですが、でもこの教育大綱で謳われているのは、地域もみんなで子供を支えて育てていきましょうという意気込みを語っているわけなので、パブリックコメントももっとたくさん寄せられるような発想とか、そういったアピールも必要だったのではないかなと思いました。

〇市長
　パブコメの数っていうのはどうなのですかね。他のものも、そんなに多くないですよね。

〇教育部長
　そうですよね。

〇市長
　私も市長なので、関心を持ってきましたけど、思ったほど多くないし、内容のレパートリーも、あんまり広くないように感じていて。どうですか、数について何か参考になるものはありますか？これまでこんな数字でしたとか。教育長どうですか。

〇教育長
　こういうのはある意味、理念的なものじゃないですか。
　どうしても理念的なものになると、利害関係が直接ないと意見はそんなにはないのかなという感じがします。
　何か具体的なもので、自分に利害関係が回ってくる場合だと出てくるという感じはします。

〇教育部長
　私の経験でも、計画者で具体的な施策取組が載ってくると、それに対してもっとこういうことやってくださいという部分が出てくるパブリックコメントはありますが、教育長が申し上げたとおり、理念的なものとしてお答えをというと、これ位の答えになってしまうかと思います。

〇吉田委員
　ホームページの閲覧数は分かるのでしょうか。

〇教育企画課長
　調べればわかると思いますが、今日は数字として持ち合わせておりません。

前回のときにも一般の方からのパブコメは件数としてそんなになくて、前回は大きく改変されたので、学校関係の方にお声をかけた結果、教職員や校長先生などからご意見がかなり多くありました。

やはり一般の方からっていうのは、極めて少なかったと思います。

そういったところでは、市議会からもこの中身についてのご意見は特段なかったですが、せっかくできた大綱で、一番のよりどころになるものなので、誰にも知られないということがないように、今後は皆さんに知ってもらうことに意を配していただきたいというようなご意見を頂戴しましたので、知っていただける形に努めてまいりたいと考えています。

〇市長

今後、できるだけ数が集まるような仕掛けも含めて考えて。色々な人たちに興味を持ってもらいながら協議、議論そのものに関しても、関心興味を持っていただき、それが理念的な内容であっても、逆に言うと理念的なことであればあるほどより広く、より様々な角度から見ていただいた上でご意見を頂く、そんな環境づくりが実現するといいですね。

〇教育企画課長

ありがとうございます。

今申し上げたように、特に理念や方針その他のところにご意見はありませんでした。パブリックコメントの中で、若干、言葉の使い方で、「こども」というのが例えば漢字の「子供」であったり、平仮名の「こども」であったり、いろいろな表現があるということで、それぞれ使い方もありますが、同じなかでは、統一したほうがいいというパブリックコメントのご意見も頂戴しましたので、その辺りを文書の体裁を整える中で修正します。それから先の 11 月の議会で、この教育大綱の一番最後には、取組の実施計画として、総合計画の政策取組~~基本~~方針を付けることで、この総体で市の教育振興基本計画として大綱を仕上げていくということをご報告させていただきましたが、先の 11 月議会で新たな総合計画も承認されましたので、ここの部分を加えて、最終形として報告をしてまいりたいと考えております。よろしくお願いいたします。

〇市長

他には、皆さんご意見等いかがですか？

〇鈴木委員

先ほどのパブリックコメントの中で気になったのは、自己肯定感と自己有用感の関係のところですね。自分中心であるのは当たり前だと思う。ありのままを認めるというのは当たり前なのだけど、そうではなくて、受け取る側が個々を認め合いができないかなと。改めて子供たちが自分を好きだという気持ちを育てていかなければいけないと思いました。年齢とともに、もっと下がってくると思います。

この前、自殺予防の件で、今日の静岡新聞にも載っていましたが、そういう気持ちが中学、高校とどんどん下がってくると、誰にも相手にされてないとか、孤独感がというようなことで自分に自信が持てないというのは、将来的に自ら傷つけるところに行くと思うと改めてびっくりしましたし、子どもに接する際にはもう少しこれを育てていきたいなと思いました。

○市長

ほかにいかがでしょう。

○吉田委員

私はそのアンケート結果で気になったのは、（1）の自己肯定感の中の一番右側で、失敗しても自分を責めずに前向きに考えることができればいいのですが、どんどん下がっていくのは、やっぱり失敗を恐れてしまう、失敗は許されないという気持ちが強くなっているということだろうと思って。市長もチャレンジというのは掲げています。子供のときからこうだったらどうなるのと不安はありますし、年齢を重ねるごとに失敗すると恥ずかしい気持ちが出てくるのは当然だとは思ますが、失敗しても次につながるまで行かないと、教育としては将来の芽を育てることにはならないので、その辺は意識した教育に注力してもらいたいと思います。

○市長

どうですか、先ほどの鈴木委員の「自分のことが好き、失敗しても自分を責めずに前向きに考える」これをもっと高めていく、本当にそのとおりだと思います。その辺り、補足的なご意見とか考えあればいただけますでしょうか。

○山本委員

子供はこのようなアンケートをやれば、こんな数字になると思いますが、チャレンジしたら、こんな人生を送ってみたいというような項目もアンケートに入れてみれば、また違う数字がでるのではないかと思っています。本当はこのアンケートの裏側には、実はこういうことやってみたいっていうのが隠れているような気がします。別な言い方で聞いてみたら違う数字になるのではないかと思います。

○溝口委員
　逆に、失敗しても自分を責めず前向きに考えることについて、これがどんどん年をとるにしたって下がっているというのは、責任感が強くなってきた表れかもしれない。この結果が積極性がなくなっているとか、そういう子供たちの傾向につながっているとすると心配なのですが、逆にきっちり皆さんが教えて教育をしてくれたおかげで、自分の責任っていうのをすごく感じられるようになった子であればすごくいいなと思います。結果として、沈んでいる子が増えなくて、責任をどんどん持って頑張るっていう子が増えてくるとうれしいとは思っております。
　このグラフだけだと何となくあんまりよろしくないグラフなのかなと思いますけど、逆の見方もできるかなというふうに思います。

○市長
　私、自分がこの年代だったらどう答えるかと考えています。
　多分、かなりの部分、かなりの質問に対して結構ネガティブな、例えば、最初の私は自分のことが好きである。いうところは、小３ぐらいだったらYesかもしれないけど、後はNoかなあとか。その背景を考える中で、今まさに山本さん、溝口さんがおっしゃったように、思考が深まっていけば深まっていくほど、例えば一つ目の好きかということも好きなこともあるけど、嫌いなとことが増えていく。すごく好きなところが増えたら「できるじゃん！」みたいな。でも、またある時にマイナスの「駄目だな。」みたいな。すごくぶれると思う。
　その中で、山本さん言われたような、ちょっと聞き方を変えてみたりすれば、もしかしたら、もっとチャレンジすることができるかもしれない。
アンケートの聞き方も、もしくは答え方も難しいと思います。捉える方もこのアンケートで、評価して取組を変えてみようかって、非常に難しい。この答えの判断もどういう考察をしたらいいか、平野室長に考察していただいたし、考察のとおりですけど、もっともっと、奥があるような気もする。

○吉田委員
　確かに「自分のことが好きである」「はい。好きです。」ってそんな自信をもって答えるのは、小学校低学年だからこそだと思います。聞き方としては、「自分にいいところはあると思う」とか、そういうふうに聞いた方が。白黒つけ過ぎているような感じがします。

○鈴木委員
　「どちらかといえば」というところは揺れている子は、「どちらかといえば」っていうところにつけると思う。

　でも、揺れないって、いやそうじゃないよって言って、嫌だよ、嫌いだよとか、いいとこないって思う子が、私は上の部分のプラスじゃないのかなと思います。
　でもそれが好きか嫌いかっていう、人との関係の中で自分が好きか嫌いかというとこなのかと思う。

〇吉田委員
　思春期は新しいアイデンティティーを構築する段階だから、自分のこと嫌いって思うのはごく当たり前の発達段階かなと思うし、難しいです。

〇鈴木委員
　難しいよね。困っている人に出会わないっていう子もいるし、感じない子もいるし。

〇市長
　自分のことを振り返ってみても安定しないというか、あっちだったりこっちだったり。自分自身も本当に変わってきましたからね。友達なんか要らないとかね。その時代時代につき合ってきた友達とか、もしくは、ずっと付き合っている友達とか、いろいろいると思うのですが。
　その時代にしか会ってなかった仲間は、自分に対してこういう人間だと思っているだろう等、色々反省しながら自分もきていますけど。本当に様々だったような気がする。自分はその笑顔がいいと言われる。自分でそれを本当に認められるようなったのは、ごく最近で、昔は大嫌いだったのです。小学校の頃に、「規之くんはいつもにやけている」と言われて、そのにやけているというのがすごく嫌いだった。自分自身、ずっとその思いが30代40代、下手したら50代になっても笑顔が嫌いな自分だから、笑顔＝にやけている、みたいな。何か真剣に考えてない等。例えば、ヘラヘラしているとか、幼少期にずっと刷り込まれて本当に嫌いだったけど、やっと、それこそ市長になってから笑顔がいいって言われるから、やっとメーターで50のプラスのほうになったかなぐらいで。それだけ言ってくれるなら、もしかしたら本当にいいのかなとやっと思えるぐらいです。
難しいというか、私はそういう意味では自分のことが好きじゃなかったし、もちろん自信もそういう意味では持てなかったし、評価と自らの思いがなかなか一致しなくて、あなたそこを自信持ちなさいよっていう、絶対良いところと言われても、思えない子たち多分いると思う。自分と一緒で。だからそういう意味も含めて、アンケートってなかなか難しいかな。これを見てもすごく感じました。

○教育長
　僕はこの結果を見たときに、まず今回アンケートやってくださってありがたいなと思ったことと、回答率がこんなに高いことにすごいびっくりして、こんなに回答してくれると思いました。
　全体的に、もっと天邪鬼の子供がいてもいいのかなっていう感じもしました。
　「自分のことが好きである」っていうのは、時と場合によってえらく違うので、そうだろうなと感じはしました。
　あと、「失敗しても自分を責めずに前向きに考える」のところですが、学校は、私の目から見ると、その答えが分からないとか、不正解だと、何か恥ずかしいとか、嫌だとか、手を挙げて発言すると間違えるとどうしようかみたいな雰囲気があるじゃないですか。だから失敗を恐れる社会のような感じがする。
　だから、そういうのをもっと払拭してあげないと。どんな失敗してもいい、許される。間違ったことを言ったらどうしようかと私たちがずっと思っていた。だからそういうことは結構影響するのではないかと少し思います。
　何となく、正解を求めていますよね。テストも授業でするじゃないですか。そこは何かもう少し払拭してあげて、先生方も一生懸命やってくれているので、その結果でしょうとは思います。だから、今こうなっているだろうと思います。

○市長
　私、留学生を海外の高校や大学に送る仕事に力を入れてやっていまして、特に英語圏です。アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、5か国の中学か高校、大学へ送る仕事をかなりしましたけれども、特に高校に行くと、これだけは日本から来る生徒さんにしっかり言っといてくださいという3条件が、「授業に出ること」、「宿題をやること」、もう一つ「授業に参加すること」。先の二つは、何とか頑張れるけど、「参加する」は、どこの日本人もみんな苦手です。
参加するとはどういうことかというと、授業で色々問われることに自分の意見を発すること、これができないです。何でできないかというと、幾つかありますが、まず英語なので、言葉も苦手っていうのはもちろんありますが、その前に、自分の意見をまとめるトレーニングがされてないということと、恥ずかしいというか言って間違ったらどうしようというこの二つ、これがすごく大きい。発言することのトレーニングと間違ったことを言うことに対する恐れという、これは何かというと、今、袋井市の袋井型教育は、授業に参加していろんな意見を言い合うとか、そういう、参加する方の授業を積極的に取り入れて、すばらしいと思うのですが、それをもっともっと日本の授業として、小学校から高校、大学に至るまでやらないといけないというのを、特に英語圏の国と比べると明らかに少ないだろうなと改めて感じた次第です。

今、袋井型教育に力を入れてもらっていますけど、それをさらに力を入れていただくことと、そういう〇✕(マルバツ)ではなくて、正解のない思いをいかに声にして出せるのか、言えるのか、言える環境がそこにあるか、クラスにあるか、仲間にあるか。それがすごく大事だと思う。

それを、言えるようになれば、もしくは、言ってまたそれを受け入れて、それで次、またこれはどうなの、のような再提案できる、そういったことができていくと先ほど山本さんが言われたポテンシャルが日本はもともとあると思います。そういったものを感じましたね。そういった意味でやっぱり、〇✕が主に問われるような、授業をなくしていくのが大事かと思いました。正解のないところに意見を言える環境を是非醸成してほしいと思いますね。

〇溝口委員

今の市長のお話で言えば、すごく同感するとこもあって、前にフィリピンの英語学校へ行っていたときがありましてね。少人数クラス五、六人のクラスでやっていたときに、20 歳過ぎの女性の方が一緒にいたわけですけども、先生に聞かれても答えられない。昨日何やったとか、普通のことですよ、

ほかの国の方もいましたけども、みんな適当に答えているけど、1 人だけ急に答えられなかった。質問には答えないので、みんなで「何で？」と後で聞いたら、その子は真面目で、昨日何をやったと言われたら、本当に自分が昨日何やったことを全部思い出して、それを真面目に答えようとしているわけです。いやそうじゃないと、みんな適当に言っているから、その勉強だから、そこまで考えなくていいよと言ったけど、やっぱりできない。そういう人が結構いるので、自分の思ったとおりのことが言えない人がいるのは、すごく理解はできます。そこをどうやって払拭していくかは、一つの授業の課題かと思います。

〇吉田委員

子供の授業を見て、グループワークが増えてきていいことだなとは思いますが、そのグループによっては、できる子はちゃんとやれるけど、ただ聞いているだけの子とか、その辺が本当のトレーニングになっているかと思います。

〇山本委員

市長のリーフレットに、市長が外国に子供を送り出す話が書いてあって、今日お聞きしたいと思っていたら聞けてよかったなと思います。私はこの教育委員やるようになって不登校に気が向くようになったのですが、皆さんと一緒で、不登校の子を見ていると、全然できないじゃなくて、もったいないなっていう気持ちもある。学校行か

ないでもったいないなというのはある。
　外国に行くと、全然環境が違うので、そういう話を聞きたかった。きっとトレーニングを変えれば、学校行くようになるかもしれないと思いました。

〇市長
　環境も変わる。特に高校生で送った子の中には、不登校で全然成績つかないような子も結構いました。
　もちろん英語が得意だから留学、成績が良いからさらに伸ばしたいから留学というのもいるけど。成績が悪いからとか、学校に行けないから留学っていう選択肢がすごく増えてきて、私はリカバリー留学と~~そ~~言っていましたけど。例えば中学に3年近く行っていない、高校どうしようというときに、高校留学を考える。日本は考えにくい。だけど、大丈夫ですよ。我々としてもそういう子でも行けますよとＰＲをしていたので、そういう子たちとか親御さんから来る。そういう子でも留学した実績あると見ましたけど、本当ですか？いや本当ですよ、ということで、実際行っていただくと、見違えるようになって帰ってくるケースがどちらかというと多い、圧倒的に多いです。行ったけど、やっぱり駄目でしたっていうのも中にはいますけど、率としては、力つけて帰ってくるケースが圧倒的に多くて、それは何でできるのか。
　This is a Pen がやっと書けるかぐらいしか英語力ないのに、どうして行ってリカバーして帰ってくるのと。
　成績だって中学全然学んでないのに何で海外の高校で成績付いて帰ってくる。それができちゃうのが子供の力だなと。
　子供を信じる力はどんなときも必要だと思っていて。基本はこの部分がないから、例えば、1から10あるとして、この子は10やってないから11なんてできるはずないというのが、普通の考え方です。1から10まできちんとやって、次11行きましょうね、11終わったら次に行きましょうね。だけど、1から10を何もやってなくても、いきなり11ができちゃうのが子供の力だと思う。できると信じてあげることが、必要だと思う。
　例えば1から10に関して1から10の評価が例えばあるとすると10で100点がないと11行けないかっていうと、決してそうではなくて、1が10個すごく薄いものがあって11行くいろんなケースがありますよね。
例えばいきなり11与えられたときに、何でそれを信じて11できるって思ってあげるかっていう、1から10まですごく薄く、短期間で学んでしまって、11に到達する、次の順に行くとか、なんでもできちゃうと、それを信じてあること、それがすごく大事なのだろう。
　これは社会に出ても同じで、会社経営者の中には、高校時代までも本当にヤンキー

で、仕事勉強なんか全然してないけど、すごく立派な会社の社長もいます。
中には、上場しているような企業の社長でも、全く勉強してこなかったという社長も見ます。そういう人たちも、あるとき突然目覚めて、社会に出て5年ぐらいして、いかに勉強してないことが駄目だったかことを社会に出て、自分の仕事をするために必要なことを一気に学んで、勉強が好きになって、急激に成長してくとか、そういう社会人もいます。
　それまでの勉強の過程って大事だけども、それは絶対じゃないし、子供は埋める力ないものを埋める力もあるし、それを信じてあげる親たちの気持ちがすごく大事だ。子供に対しても、もう成人した大人に対しても、僕は感じているのです。
　子供たちに対して信じてあげる親の力、社会の力っていうのは、大事だなと。だからこそ、その力があれば、留学できると。普通の親は英語もしゃべれない、勉強もしてないのに、海外に行ってできるわけがないじゃないかっていうのが普通ですけど。送り出す親は、もしかしたらこの子はこんなことできるかもしれないって、そこで思ってあげること、常識的に考えればできないけど、それを信じる力がやっぱり、すごく大事で、子供は信じてもらったし、信じてもらえた親がいたことで、助けられる。だからそういう、大人にならなきゃいけないと我々は、思うのです。

〇山本委員
　やっぱり不登校の子はもったいないし、能力を持っていたら、もしかして自分しかできないことをやりたいと言ったら、やっぱりやらしてあげたいなという感じがあります。

〇溝口委員
　今の話すごく興味があって、留学行って成功してというか伸びて戻ってくる子。何で伸びるのか、日本じゃ、例えば親の理解がそこで急にあったとしても、日本では伸びなかったかもしれない。それが海外で伸びるっていうのがすごく興味があって、例えば、そこの留学先の先生や誰かの寛容があったのか。
　何が自由な学校なのか、厳しい学校なのか。日本と何が違うのかというのは、すごく興味があってね。日本でも例えば先生の寛容さとか解決する部分がないかなというのを見ていくと面白いなと思いました。

〇鈴木委員
　私の知り合いが不登校で奄美大島にいる子がいる。そこに行ったら、学校に行くし、どんどん伸びてくる、やっぱりもともと持っている。そういう子もいるので。環境が変わったこと、受け入れている人がフランス人だそうです。フランス人がそうい

う不登校の子たちを、受け入れて、山村留学みたいな形で、島の人たちも来てくれてありがたい、温かい環境の中で、伸びていく。不登校で海外に行く子も、いろんな要素があると思います。学校自体は変わらないかもしれない。でも、それを取り巻く周りが違う。

だから地域ぐるみで育てなきゃいけないだろうなと思います。いろんな要素があるだろうと思いますが、やっぱり信じてやろうというのがとても大事なことで、確実に肯定感につながる。やっぱり管理的で枠が狭いじゃないかとこの頃感じています。もっともっとおおらかに、〇✕じゃなくて▲でもいいよという見方をしたいし、授業もそうでありたいと思っています。

今フランス人のお話が出ましたけど、フランスの教育はどうですかとか、留学をするとき、ニュージーランドはどうですかとか、イギリスの国単位でとらえたり、違う環境、何かパラダイスみたいな、もしかしたら、今までとは違う、そういうとらえ方をされるケースも結構ありますね。

実際留学した人も、ニュージーランドはすごくいいんだ、アメリカの教育って自由でね、イギリスは、ニュージーランドは、みたいなそういう捉え方をするケースは結構ありますが。でも、よく見るとそれはある意味偏見にも近くて、一部分しか見てない。トータルすると、結局日本だろうとアメリカだろうとイギリスだろうと結局一緒だと僕は思っています。では、なぜ立ち直ったりするのか。

鈴木委員が言われるように、いろいろなすごい要素がある。環境が変わったから、例えば、親もいなくなって頼れる人が無い、自分しか頼れないからもうやるしかないとか、もう背水の陣みたいなところもあるかもしれない。私が確認したわけじゃないですけど、感じるのが子供のプライド。例えば、私も妻と喧嘩するとこの辺で謝らなきゃいけないなと思いながらも、謝らなくてずっと行っちゃう。本当は１日で喧嘩終わるはずなのに、3日も続いたみたいな、それは何でそうなっちゃうかっていうと、上げた拳が収まらない、すぐ引き返せばいいのに引き返せないと、分かってはいるけどできない。

子供もそういうところあると思う。今まで学校に行けなかったのに、いきなり今日行けない、簡単に言うと今まで突っ張ってきたのに、今日いきなり変えられない。

例えば、勉強してなかったのに、いきなり今日から勉強なんかできないし、そういうところでは海外に行くのが、ある意味何もかも全て違うし頼れるものも何にもないところに行くと、リセットされて、プライドも何もないというか、どうせ分からないから、どうせ１からやらざるを得ないから、もう１回やり直せる環境というか、昨日まで喧嘩していたけど、それを引きずる問題ないからゼロベースからやらざるを得ない。そういうところが、あるのかなという気が何となく感じます。

子供はできないそれまでの彼らの人生、我々とは時間軸がちょっと違うけど、彼らにとってはそれが全てなので、それをどういうふうに、傷つけずに、日本の社会で、昨日まで不登校だった子を学校に行かせるかは、その歴史をある意味我々もリセットとしてあげなくては次の新しい一歩踏み出せないのではないか。

だから、不登校になってしまった子を、学校に戻すのに苦労するのは、そういう歴史があるからだと思う。プライドが生まれてきますし。

〇教育長

先ほどの信じる力につながるわけですけど、今日、今井小学校の校長先生と話す機会がありまして、今子供たちにタブレットを持ち帰らせていて、パソコンを何に使っているのか聞いたら、家庭学習よりも明日の予定を配信しているためだと言った。そんなに重いものをそれだけのために持ち帰らせるのはやめた方がいいじゃないかと言ったら、校長先生もそれ思っていると言ったのですが、それを止めさせるとなると、予定の確認だけで１時間ぐらい小学一年生はかかりますと先生方に言われたみたいで、それで授業はつぶさせないと言われたようで、配信を無くすと忘れものをしてくる人がいるし、親御さんからは何で配信してくれないですかとご意見も出るだろうと言っていました。忘れものをしたのはあたかも学校のせいぐらいのことは言われかねないと校長先生に言われた。

でも校長先生は、僕はそれでもいいと思っています、忘れたらしょうがない、先生方も親御さんもそうだけど、子供たちが自分でやらなければならないことも、子供が転ぶ前にちゃんと杖をつけてあげなければというふうになっている。失敗することをさせてはいけないと思っていると言った。

校長先生は子供を失敗させてもいいからと思っているけど、先生方にそれを提案すると難しい。そんなことしては駄目と言われてしまう。

だから、そのマインドセットがすごく難しいと校長先生がおっしゃっていて、僕は何とか変えてほしいと伝えました。とにかくそれを変えていかないと、子供が失敗することも知らないで成長したのでは、本当にどうなっちゃうのと思うので、大人がそこを全部先回りして用意しては駄目でしょと思う。一事が万事的なところがあるので、学校でそういう文化を払拭しないと、いつまでたってもこの数字がどんどんが下がっていくのではないかと思いました。

〇市長

私が最初に書いた本でヘリコプターペアレンツをやめようってサブタイトルをつけた。聞かれたことありますか、ヘリコプターです。

アメリカで多分 15 年ぐらい前にはやった言葉で、今まさに教育長言われたよう

に、子供の上を飛ぶヘリコプターのように、親が常に子供の様子を見ていて、何か失敗したらすっとおりてきて子供を手助けする。そういう親をアメリカでヘリコプターペアレンツと言って、要は結局それをすることで子供の自立、子供の生きる力を奪ってしまう。だからそういったヘリコプターペアレンツ的なものから脱しようじゃないかっていう議論がアメリカでも10数年前、まさにそういうことですね。倒れる前に杖を用意しない。転んでみないと分からないというか、痛いから転ばないようにしようとか、やっぱり生きる力を自らつけていくこともすごく大事。それが今言われた、現場からブーイングになると、なかなかそういう関係をつくりにくいです。

〇教育長
　結局、多忙になることが増えるので、そこのバランスは難しいと思いながらも、先生の心の中ではそういうこともちゃんと認めてあげるという、ケースバイケースでやっていく必要があるんじゃないか思う。

〇市長
　分かってはいるのですよ、先生方も。だけど、自分の身に起こる手間とかそういうことを考えると、それはできなくなるという、さっき言ったように親から何で学校配信しないんだ、そういうことを言われると、なかなか一斉に否定はできないだろうと思いますし、少し悩ましい部分はあると思いました。

〇教育監
　今日、たまたま石田副市長さんが、学校現場を見る機会がないということがありましたので、一緒に袋井中と笠原小に行ってきました。
　その時に副市長さんがおっしゃった言葉で、「カーリング育児」というのがありまして、いわゆる先回り教育です。
　全て道筋を付けてあげて失敗をしないように成功させるようにということによっての弊害が出ることですが、今の教育長さんがおっしゃった話と重なるかと思いました。
　あと笠原小の校長先生と話をしたときに、「完璧はあんまり求め過ぎないでほしいと」校長のほうから職員に言いまして、あと、子供のほうから少し休みの時間を増やしたいと願いがあったということで、今年から2時間目と3時間目の間の休み時間を10分から20分にしたと。そうすると、その間は結構中学年ぐらいまではみんな外に出て、今、沸々している子供たちも、そこで発散するような機会があり、先生方によく言ったのは、そんな無理しなくても、完璧に求めなくていいよと、そのような話をずっと言っていたら、今年は、結果的に不登校はいなくて、ほっとルームのほうに1

人４年生が来ていると、そういうことがあるという話でした。ですので、さっきの皆さんの話を聞いてみると、相通じるところがあるのかなという印象を受けましたのでお話しさせていただきました。

〇市長
　アンケートの話はとりあえず区切りにさせていただきたいと思います。
　よろしいでしょうか。
　ありがとうございました。
　それでは、議事は以上ということにさせていただきますので、進行をお返しします。

〇教育企画課長
　若干の意見交換に入ったような時間もございましたが、一旦仕切りをさせていただきまして、教育大綱は先ほど申し上げましたように、整合した形で最終議会にかけて、来年度から新しい大綱で進めてまいりたいと思いますのでよろしくお願いいたします。
　それではここからは改めて意見交換ということで時間まで行ってまいります。
　来年度以降の総合教育会議の関係もありますので、先に資料のほうで少しご説明させていただきます。
　資料４のオレンジ色の、お手元にあるものです。
　教育委員の皆様には、定例会で一度ご案内させていただきましたので、改めてのお話ではありませんが、今年度教職員の働き方改革をより一層進めるということで、国で、法改正がございました。いわゆる給特法の改正ということですが、働き方改革を一層進めるために、それぞれの教育委員会では、それを具体的に取り組むための業務量の適切な管理や健康管理を確保するための計画を、取組計画を作るように国から来ております。
　それ以外にも、教職員の処遇とかありますが、我々に関係することは、この計画の策定になります。
　この後、県のひな型を参考にしながら、袋井市としての計画を策定してまいります。
　これにつきましては、この次の２枚目のほうにもありますが、教育委員会だけではなく総合教育会議に報告し、みんなで実現に向けて意見交換しながら取り組むように国からも示されておりますので、来年度は市が作ったこの計画に対して、例年７月ぐらいになると思いますが、次の総合教育会議のところで、これをお示ししながら、どんなふうにあるべきだというような意見交換も含めながら、議論していくようになる

と思いますので、これは参考として、来年度こうして頂くようになりますとあらかじめご報告、ご承知おき頂いたうえで、ここからは時間まで自由な意見交換をしていただければと思いますのでよろしくお願いいたします。

○山本委員
　先ほど教育長がお話ししたことですが、非常に真面目な先生ばかりなので、私なんか思うのは、部活運動がなくなってしまっても先生が忙しいのは無くならないのではないかという気がします。
　部活動のお金があるわけではなくて、家から学校まで離れていてお母さんも働いていると、部活に入るのやめようかみたいなことを聞いたりしますので、それで、先生も忙しくなってしまって空いている時間にまた働いてしまう感じがして、本当に部活動が無くなって先生たちが楽になるのか、そんな気がいたします。

○教育長
　中学校の時間外の大きな要因の一つは部活動になっているので、中学校については部活動が減った分について、その分基本的に時間が減るっていう可能性はあるかなと思いながらも、山本委員がおっしゃったように、先生方は真面目なので、限りなく仕事する。授業研究とか授業準備とか、限りなくやる人もたくさんいらっしゃるので、どうしてもその分減るかというと、そうじゃないかもしれないというふうに思っています。どうしてもやっぱり先生方が一生懸命っていうのがあり、もっと人がやってもいいとか、今の私の仕事じゃないと思っていい加減になってくれればいいと感じているのですが。減ることについてはちょっと注視していかなきゃいけないと思っています。

○鈴木委員
　授業準備はしなければいけないですね。だけど、横並びにしたいっていう感覚がまだ強くて、きちんと形を整えておかなければいけないという気持ちがまだまだ強いような気がしますね。
　だからそれが管理になったり、変なところで約束事を作ってしまったりとかで、余計に多忙感を増しているようなところがあるのではないかと思います。でも、私たちの時よりははるかに仕事量が少ないと思います。

○山本委員
　学校訪問をしていていい加減な先生に会ったことがないので、私からしてみると、まじめな先生しかいないと思っています。

○溝口委員
　働き方改革が何か、自分の時間を増やせばいいと世間的な考え方もあるので、要は仕事を減らせ、自分の時間を増やせという方向に動いてしまっているところがあるので、あまり好きではないですが。今も言っていましたが、働きたい人はいっぱいいるわけですよ。積極的かどうかは別としまして、真面目に明日子供たちにどうやって教えたらいいか、真面目に考えている先生いっぱいいるわけです。それを、時間外だとか、ゆっくりで減らせというのは、ちょっと違うなという感覚は持っています。
　そこは自由でもいい、給特法のいいところは労基法と違って自由にできる、前向きに考えたらそういうことじゃないかと思う。そこの考え方を教育委員会でもいいし、校長先生でもいいですが、若い先生に示してあげてほしいと思います。

○未来の教育推進室長
　２つありまして、一つは同じ職員室の中で「帰ろう」と思っていても、他方で一生懸命やっている、部活動をやっている、授業研究をやっているとなると、自分がそこから「お先に失礼します」と言えるような雰囲気がつくりづらい。
　今度は保護者の立場から見て、「あの先生早く帰るね、何で？」っていうようなことで、もう少し一生懸命やってくれてもいいのにという期待感が学校にあって、それに応えないと教師としてやっていないじゃないか、あの先生はラクしていると思われる。それが常に背中に感じているので、なかなか帰りづらい。というこの二つは、現職のときから職員から何回も言われました。

○山本委員
　子供を迎えに行かなくてはならない場合はどうするのですか？

○未来の教育推進室長
　それは本当に後ろ髪を引かれながらも、どうしても子供があるからすいません、先にごめんなさいねという感じで帰ります。

○市長
　今でもそうですか？

○教育監
　今では退勤時間は昔に比べれば早くなっていますので、今はそれほどではないと思いますし、全部の先生がそう感じているのではないと自分では思っています。
また、校長先生とお話をすると、時間のゆとりがあった分、皆さん本当に教員を好意

的に受け止めて真面目な先生ばかりだって話を捉えているのでとてもありがたいですが、なかなかそっちのほうまでに意欲がわかないような先生も数名いらっしゃる。
校長からすると空いた時間をうまく使いながらバランスをとりながら考えていきたいとおっしゃっていました。

○溝口委員
　正直言って家では、授業研究とか、教材作るとか、やっている人はいるでしょう。

○教育監
　いますね。
　ただ万理子先生がおっしゃったように、昔はそれが当たり前でしたが今は持ち出し禁止になってから、在校時間は長くなったっていうのはありますよね。

○鈴木委員
　昔は、女性の先生方は、5時になったら帰らないと子供を迎えに行かなくてはいけないから、男性職員は残っていてという時もありました。その代わりうちに帰って子供が寝てからプリントにまる付けする人たちはたくさんいました。でも持ち帰りはそんなに多くなかった。それからだんだん時間に余裕があると時間の使い方が下手になってきて、だらだらとやるっていう部分もありますが、今は帰宅時間も早くなりましたね。
　明らかに部活動をやっていた時よりも在校時間は短くなっていると思います。でも、教材研究やっている人が長いか、そこもいろいろと問題があると思います。
　先生方が不安に思うのは、保護者対応と思います。保護者から電話がかかってくるのが大体夕方からで、そこの対応が長くなるとか、そこでしか話ができないというところがあり、それをチームで対処するというのは当然だけど、それぞれに時間を取られるという、みなさんが思っているのがそこかなと思いました。先生方が少しでも授業準備の時間に充てられるように余裕を持って子供に接することができれば、心が安定してくるので負担感は感じなくなると思います。なるべく外に出せる仕事は出していくことも必要だと思いますが、それについては何ができるかということを模索して、地域とどう連携していくかということが、これからの課題だと思います。省けるとこは省いて、任せることは任せてしまうということがこれからは必要だと思います。

○市長
　今も校長先生は、朝、校門で子供たち出迎えたりしていますか？

○教育監
　しています。

○市長
　それは大変ですよね。
　校長先生が出てくるから、外に出なくてはいけないと思う人もいるのではないですか？

○鈴木委員
　例えばクラスを持っている先生は、自分のクラスに行けるような体制に変えてもいいと思います。

○教育監
　PTA は挨拶当番でやっているので、担任には顔を出して戻りなさいと言ってはいますが、それも痛しかゆしで、保護者にしてみると、そこで担任の先生と顔を合わせられるので、顔を見せるだけでいいと話ながら、そこは賛否両論ありますが、やめてもいいかと思っています。

○教育長
　構造的に勤務時間より子供たちのほうが早く来るので、勤務時間も早く行かなければならない。この構造自体がおかしい話です。
　だからそういう役割も、地域の人にやってもらうとか、ほかの人やってもらうということを考えていかなくてはいけないと思います。

○鈴木委員
　袋井南小は、バスの関係で登校時、支援員さんが付いています。お金を出していただいていますが。そういう形で見てもらっていくといいかなと思います。

○教育長
　今度計画を作りますけど、先生方のやりがいを感じられるような計画にしないといけないと思っているので、時間外の数字を一番最初に持っていくのはいかがなものかと思っています。
　ただ、過労死ライン 80 時間を超える人は問題なので、そこは少なくとも、その人たちの健康を考えれば、8 時間を超える残業っていうのは基本的にはやめましょう、ということにしないといけない。時間よりも何かやりがいとか、子供に向き合う時間が増えました、やっていて本当に楽しいですと、そういう先生方を増やすような計画にしないといけないと思っています。

〇溝口委員
　今の計画ですが、とにかく早く帰ればよくて、健康を考えたときに、80時間とおっしゃいましたけれども、今はもっと下がっています。実際には何かあったとき、裁判になったときの判断は、本当に短くなっているので、そういうのを加味しながら、このぐらいにしたほうがいいよ、そういうふうに人に指導するのはすごくいいと思う。その辺で納められないかなと思います。

〇鈴木委員
　袋井では今、色々な施策をしていますが、それが子供たちにとって学校の居心地がいいか、学校に必要性を感じているか、見直していく必要はないかと思う。
　特別支援教育も充実していますが、子供たちの目線に立っているのかというところをもう1回見直す必要があると思います
　昨日の静岡新聞に「インクルーシブ教育が遅れる日本」という記事が載っていて、序列と管理が学校にはあるだろうと思います。色々な子がいて、色々なところがあっていいというところを、もっと進めるにはどうしたらいいか、この前の定例会で話題になった消しゴムと鉛筆の話、自分の時もそういうのをやめてきていたので、えっと思った。
　まだどこの学校でもそれを求める先生方がいる、先ほど吉田さんから規則もあるよという、何かまだ窮屈感を感じているかというので、そこを払拭して、子供たちが楽しんで袋井の教育が受けられる、それが不登校の減少にも繋がっていくのかと。不登校が減らないというのは袋井の大きな課題であるし、そこを何とかしていきたいと感じました。

〇溝口委員
　私は学校をいろいろ回らせていただいて授業を見させてもらって、最初は授業がよくわからなかったですが、いろいろ見方を教わっていくと、あんまり楽しそうな授業はないなという感じはします。後ろのほうで別なことやっていたり、タブレットで違うことやっていたり、皆タブレットをやっているが違うものを書いていたり、その辺バラバラでもいいのかもしれませんけど、子供たちが先生の話とか、周りの話、前向きになって聞いている授業が少ないかなと思えてきました。先生も大変で、変なことをやれば、色々なところから指導があるし、これだけ教えなければいけないというのもあるので、そこは分かったうえで何とか子供たちの興味を引く授業にならないか、何か指導法や考え方がないのかというのは学校を回っていて思いますので、是非その辺も進めてほしいなと思います。

○吉田委員
　窮屈さを子供たちが敏感に感じていて、中学校だと肩に髪の毛がついたら結びなさいとか眉は切ってはいけませんとか、まだそんなことを言われる時代なのかと。その中で多様性と言ったところで、その子供にしたら、自分を信じられていないと感じるのは当然ですし、管理されているところに心理的安全性は生まれるわけがないので、先生方が間違えてはいけない、完璧でなければいけないという意識が強過ぎるから、その辺の枠を緩くしてもらえれば不登校は当然減っていくと思いますし、今特別支援教育で分けられて、そっちに手厚い支援という名のもとに分けられている子も実は枠をもっと広く緩くしたら、通常級のことをやれるのではないか。それこそがインクルーシブと思うので、新しい枠組みというか、新しい教育をそろそろ模索していいのではと思います。

○鈴木委員
　先日、袋井南小でCSDの関係で教頭先生とお話していた時に、ダウン症の子で言葉が聞き取りにくいところもあるけど、その子が一緒に電車で登校してきて、一緒に来た子がその子が何を言っているか分からないから、もっとはっきり言えと言ったら、その子がああそうかと言って、また言い直した。子供の中で自然にそれができているというのを聞いて。ダウン症の子を分けるのではなくて、その中で育てると色々な特性を持っている子がいるというのがすごくいいと思って。冬休みに学習会をしたときも、いろんな子がいると、支援級の子もみんな一緒に勉強もし、そこに入って特性があるけどそれぞれに自然に関わっていけるので、ほかの子たちもそういう環境を作ってほしいと感じました。

○教育企画課長
　ありがとうございました。
　いろいろ深いところまでお話し頂きありがとうございました。
　またこのような話について来年度もしてまいります。その中でいい形に進んでいければと思いますので、よろしくお願いいたします。
　来年度は7月ぐらいに1回目を開催しております。また日程は御相談させていただいて事務局から御案内させていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。
　それでは以上をもちまして、第3回袋井市総合教育会議を閉会とさせていただきます。お疲れ様でした。ありがとうございました。
　（閉会　午後3時09分）